

# 素材採取家の 異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS

17



木乃子増緒

KINOKO MASUO



ユムナ

うさぎのような種族  
「アルナブ族」の  
少女。

コタロ

犬獣人の王子様。  
岩をも砕く  
強力な爪を持つ。

モモタ

コタロの弟。  
かわいい。とにかく  
かわいい。

ビー

タケルの相棒の  
子ドラゴン。  
タケルとカニが  
大好き。

タケルの仲間  
蒼黒の団

ヘルミナント

ルセウヴァッハ領の  
領主様。何をしても  
イケメン。

タケル

ひょんなことから  
異世界で「素材採取家」  
となった本作の主人公。  
食べることで  
お風呂が大好き。

クレイ

フロライト

プニさん

スッス

ルジェ

有翼人が  
崇める神様。  
とっても猫顔。

主な登場人物

十 十 十 十

青葉の候、皆さま如何お過ごしでしょうか。

マデウスは初夏の陽気です。

緑の精霊王が両腕ブン回して『アタシの季節がやってきたワ！ まだまだオネムな眷属たちをたつき起こしてあげるんだからアッ！』と腰をクネクネして忙しそうに飛び回っていました。元気で宜しい。

毎朝毎晩俺に抱き着いて俺から魔力を吸い取って、その度にビーと喧嘩をするくらいならどこか行け。忙しいなら数か月消えていなさい。わざわざ俺から魔力を吸わずとも、トルミ村住人やエルフたちの深い信仰心はリベルアリナの力になっているはずだから。

それにトルミ村の美観や景観を維持するために組織された美観維持部隊が植物たちを綺麗に整えたり、農作業隊が日々せっせと農作物の面倒を見たりするだけでもリベルアリナは緑の精霊王としての力を得られるのだ。

そんなもんだから、リベルアリナは緑の精霊王としての力も威厳もたつぷり。

精霊や神にとって俺から魔力を吸うのは嗜好に過ぎない。嗜好ならプニさんみたいに供物をたら

ふく食え。俺から魔力を吸うな。毎朝毎晩俺に抱き着くな。鬱陶しい。

——いやいや、緑の精霊王様にそんな言葉けしからんよな。うむ、前言を撤回しよう。リベルアリナがトルミ村にしょっちゅう来てくれるので、その恩恵が凄まじいのだ。

トルミ村で育てている農作物は、病気知らずの元気もりもり。ありがたやーありがたやー。根菜は普通よりも五倍大きいのに栄養満点だし、葉物野菜や果物もいちち大きくて、かといつて美味ではなく味が濃く美味しいのだ。

ごん太い木にボウリング玉サイズの林檎がたわわに実っている光景を想像していただきたい。か細い枝にボウリング玉がずどんと垂れさがり、木がとても可哀想に見えるから。

林檎がデカすぎるんだ。葡萄も、洋ナシみたいな形をした果実も、きゅうりみたいな形をした果実も軒並み巨大化。コタロの顔よりも大きい個体が育つ場合もある。

地下道で育てているネコミミシメジやキノコグミもすくすく成長中。

過剰に大きなものにして欲れとリベルアリナに忠告はしたのだが、グネグネ蠢きながら『タケルちゃんへの愛のあ・か・しだからあ、小さくするのは無理なのヨッ！』と鼻息荒く反論された。愛が、激しく、重たいよ。

ネコミミシメジの標準サイズは一メートル以上ある。ネコミミシメジ原産地のキエトの洞に自生するネコミミシメジよりも大きいのは気のせい。ネコミミシメジやキノコグミといった、暗く湿った場所で育つ作物も面倒を見てくれるトルミ村住人たちのおかげに違いない。

もふもふのレインボーシープは元気に繁殖中。

グラン・リオ・エルフ族が婿や嫁を欲しがっているレインボーシープをいつの間にか村に連れてくるので、トルミ村で飼育しているレインボーシープは五十頭を超えた。カラフルもこもこが増築された小屋で丸まって眠る姿は最高。

野生のレインボーシープに比べて毛艶が極上であり、そのもこもこな毛も野生のレインボーシープに比べて一・五倍はある。色はパステルカラーな淡い色を持つ個体が多いのだが、そのうちの数頭に金色や銀色、真っ白なのや真っ青なのが交ざっていたのには驚いた。

食事で色が変わるのか、土壌のせいなのか、それとも毛をすく種族を持つ魔力によって色を変化させるのか等々、そこらへんのレインボーシープの生態観察はフルゴルの郷出身のエルフたちが嬉々として調べている。

カラフルもこもこレインボーシープに新たな仲間が加わった。

最近トルミ村の近くにある森から、レインボーシープの飼育小屋の一角に引っ越してきたハンマーアリクイの一家。

アルナプ族が避難して閉じ込められていたあのバリアンテの大穴から俺が救助した、例のハンマーアリクイの一家だ。

初めは警戒心が強く森から出てこなかったハンマーアリクイだったが、気が付いたら夜にレインボーシープのもこもこな体毛で寝るようになった。

明け方には森に帰っていたらしいが、レインボーシープの餌である新鮮野菜をレインボーシープ飼育担当隊がハンマーアークイ用に与えていたところ、いつの間にかハンマーアークイが仲間入りするようになったらしい。

ハンマーアークイはハンマーアントというモンスターを好んで食べるからハンマーアークイと呼ばれているのだが、基本的には雑食だった。肉も野菜も魚も食べる。

より美味いもの、新鮮なものを求めてレインボーシープの餌を食ったのだろう。

以来、ハンマーアークイたちは順調に数を増やし、トルミ村畜産隊に世話される安心安全食っちゃ寝生活をするようになった。

トルミ村は警戒心の強い野生動物にとって、食っちゃ寝ごろごろ生活に引き込まれる魅力があるのだろう。しかもエゲラリー産の一角馬の鬣たぐみから作られた高級櫛フシのブラツシング付き。それで良いのか野生動物。気持ちはわかるけども。上げ膳据え膳たまらないよな。わかるよ。

これで「珍獣図鑑」に記されたレインボーシープとハンマーアークイの記述は変更されるであろうとグランツ卿が苦笑っていた。俺は何も悪くないとは思うが、何となく申し訳ない気持ちになりました。

季節選ばず豊作なトルミ村の農作物は、アルツェリオ王国内で評判になっている。

空間魔法と維持魔法が付与された魔法トグルの中着袋バッグのおかげで長期間保存と輸送が可能となり、王都でもトルミ村の野菜が新鮮なまま取り扱あつかいされるようになった。

ルセウヴァツハ領の領主であるベルミナントは、トルミ村の農作物を不作だった領や村に優先して安価で販売しているそうだ。相変わらずお人好しで優しい領主だと、ルセウヴァツハ領ではベルミナントを崇拜する領民が後を絶たない。

だがしかし、その裏には腹黒大公閣下が暗躍していることを忘れるなかれ。

大公閣下おおたな曰く——ルセウヴァツハ領ばかりが豊かになってしまうと、妬む領主が必ず数人現れる。大店の商会長なども出張ってくるだろう。そのうえ法外な値段でトルミ産農作物を転売する闇商人などが蔓延はびこると摘発するのはとても面倒である。

それならば必要とするところには安価に、富める者には少々割高な価格で取引すれば宜しいんではございやせん？ と、大公閣下に提案したのは俺だったりする。暗躍する大公閣下の傍そばに俺。

いやいやいや、違う。違うのだ。そういうんじゃない。

大公閣下がしれつと俺に相談してくるのが悪いんだ。

グラン・リオ大陸を支配する大国アルツェリオに暗躍する尊いお血筋の大公閣下だというのに、ただの素材採取家で一般人の冒険者に真面目な顔をして相談するんだから。

しかも世間話かのようにお茶を飲みながら、しれつと「○○についてどう思う？」なんて聞くのだ。

国の重要機密事項とか国家規模で内密にしたい事案とか、騎士団の編成の話とか、辺境の村の食堂の一角でスルメイカの干物食いながら面倒くさそうに話さないでいただきたい。困る。ほんとに

困る。俺に騎士団の編成なんてわかるものか。そういうのはクレイに聞け。

大公閣下の相談事は王宮にある国王陛下の執務室か、大公閣下の執務室で話す内容のはずだ。少なくとも俺に相談する内容じゃない。某領地の某官僚の汚職疑惑なんて俺に知らせるな。犯罪組織の摘発のその後なんて言うな。そんな情報「知っている」だけで俺の命が危うくなる場合だってあるのだから。

俺は元営業であり現素材採取家。政治のことは専門家がやってくれ。暗躍するなら俺を巻き込まないでください。スルメイカの干物が気に入るすぎて常に持ち歩いているという噂は本当のようです。ね大公閣下。

それはともかくだよ。

トルミ村が富める村へと進化し、大陸の端っここの辺境の村とは思えないほどの賑やかな場所となった。

おまけにトルミ村からでも眺められる巨大な樹木が、森の中にぼっこり。

大樹ゴワンはエルフの聖域に生えたとされる幻の樹。大樹ゴワンは緑の精霊王の依り代でもあり、エルフ族の信仰の対象でもある。

何らかの理由で故郷に帰れないエルフたちのために、あの樹がエルフたちの新たな故郷になれるようにと緑の精霊王と古代馬かはつちやけた結果がアレだ。

話だけ聞けば感動のお涙流るる物語なのだが、常日頃顔を見れば口論をするあの二柱のことだ。互いに協力して何かを成し遂げるなんて。

後々厄介なことになるかもしれない可能性があるので、素直に喜ぶことはできない。

エルフの皆は喜んでた。ブロライトは喜びすぎて感情が爆発し、しゃっくりが止まらなくなるほど泣き、「じゃっぐりがどまららないのじゃああああ」と、豪快に泣き叫んでいた。泣きすぎて瞼が腫れ、目が開かないと更に泣いていた。そんなブロライトに呆れながらも共に喜んでた姉のリユティカラもまた、涙を流して喜んでた。

トルミ村近くに現れた大樹ゴワンは、オルロタの郷と命名された。

エルフの古語で「祝福」という意味があるのだとか。

オルロタの郷は主に「外」エルフたちで構成され、立国はしないと決められた。

ただただ外だとか中だとか差別しないエルフたちが憩いの場として集まれる郷として、グラン・リオ・エルフ族の執政であるアーさんが後見人となる。

トルミ特区のご近所さんになるのだが、オルロタの郷へはエルフ族かエルフ族に招かれた者しか行くことができない。大樹ゴワンそのものが聖なる樹だからな。

空飛ぶ島の赤い珊瑚の塔で経験した幻惑魔法のようなものが大樹ゴワンから放たれていて、その魔法はエルフが持つ魔力にしか反応しない。大樹ゴワンまでたどり着くには、エルフが使う転移魔法——あの、ぎゅいんと引っ張られて細胞が飛び散る気持ち悪い感覚に陥るエルフ特製転移門

から行かなくてはならない。

エルフは警戒心の強い種族だから、おいそれと郷を荒らすような輩は招待しないだろう。トルミ村やトルミ特区から眺めることならばできるから、大樹ゴワンは良い観光名所となってくれそうだ。のちのちはルセウヴァツハ領と近隣の領、最終的にはアルツェリオ王国や東の大陸全土が活気づくことを願う。

トルミ村に落つこちてきた有翼人のルカルウとザバは、風の精霊王ルジェラディの贄として存在していた。

諸事情があつて本来の精霊王としての力を失つたルジェラディは、ルカルウとザバを生み、育み力を蓄えさせ、そのうち精霊王の力を取り戻すための道具扱いをしていたわけだ。

俺たちがブチ切れたの言うまでもない。

ルカルウとザバという「意思のある存在」として生み出してしまったからには、二人に黙つて贄になれとは言えるわけがない。これが光る玉とか無機質な魔道具だつたとしたら、はいはいどうぞどうぞ使つてくださいましよ、なんて言えたのだけでも。

ルカルウとザバは俺たち蒼黒の団の仲間であり、トルミ村の家族なのだ。  
生贄なんて冗談じゃない。

そんなわけでアレコレと奮闘した俺たち蒼黒の団は、ルカルウとザバの命を救うことになり、風の精霊王ルジェ様は時々俺の魔力を吸いに顔面特攻しに来るようになったわけだ。何を言っている

のか自分でもわからない。

有翼人、キヴォルの民が住む空飛ぶ島、キヴォトス・デルブロン王国。

彼らとアルツェリオ王国との交易が公に始まった。

王国内ではハチの巣をついたような大騒ぎになり、我が我がこそがと交易立候補者が数百と名乗りを上げた。だがしかし、キヴォルは前々から秘密裏に交易を続けていたエステヴァン子爵が治める王国の食糧庫とも呼ばれるマティアシユ領と、トルミ村があるルセウヴァツハ領のみとの交易を望んだ。

どっちにしる二つの領だけが得をするわけではなく、大陸全土にキヴォルとの交易品は流れていく仕組みになるとかなんとか外務大臣のダレソレ侯爵が鼻息荒く張り切っていたとか。

大公閣下であるグランツ卿とルセウヴァツハ領主であるベルミナントには「だから前もって知らせてくれと何度も」と、軽く説教されてしまった。仕方ないよな。いつも突然問題にぶちあたり、誰かに相談する間もなく話が進み、終わりよければ全てヨシで決着してから話を持っていくのだから。

ルカルウとザバ、ルジェ様に有翼人の巫女であるパオネ、それから僧兵のフアドラたち、そのほか地上に行つてみたい希望者は順番にトルミ特区へようこそする予定だ。

蒼黒の団はのんびりと休暇予定。



しばらくはトルミ特区の建設に協力したり、各々消化したい依頼を受けたり休んだりすることにした。

休暇といっても俺は土木作業やら何やら駆り出されて休める日はほぼないのだけど、楽しくて疲れるのは贅沢なことだと自分に言い聞かせている。

たまにはさ。

昼近くまでごろごろと寝てさ。

二度寝三度寝をする日があってもさ。

いいんじゃないかなと思うんだけどさ。

「ピュピュイ！ ピュピュッピュピュ〜！」

「タケル、寝坊助だぞ！ おひさまは顔を出しているんだぞ！」

「出しているんだぞ！」

「たける、たける、ルジエはスルメが欲しいのだからないな？」

「タケルさん、見てちょうだい、こんなに大きな人参が採れたのよ！」

ビー、コタロ、モモタ、ルジエ様、ユムナは今日も早朝から元気です——

何でルジエ様が朝っぱらからいるのかなあ。

## 1 こんにちはやくの調理法

空飛ぶ島、キヴォトス・デルブロン王国からトルミ村に帰って、二か月が経過した。

先月はルカルウとザバごと空飛ぶ島が東の大陸グラン・リオに接岸。村では二日にかけてやんややんやの大宴会と有翼人歓迎のお祭りが開かれた。

俺は忙しなく働いていた。

トルミ村に帰ったからといって俺に暇は殆どない。いやいや、数十日に一度は完全に休むけども。休むと決めた日には数日前から宣言をし、早朝の強制目覚まし攻撃も遠慮してもらう。何なら寝室の出入り口に結界を張らせてもらう。いくら目覚まし攻撃の相手かもふもふの可愛い可愛いヤツらだとはいえ、俺だって朝寝坊したい日があるのだ。

ちなみにこのもふもふ目覚まし攻撃部隊、トルミ村での立派な役職である。

コタロとモモタとユムナが始めたことなのだが、飲兵衛で朝寝坊をしまくるドワーフ族が主その対象となっている。

最近ではルカルウとザバ、たまに古代狼オーゼリフと風の精霊王ルジエが交じる時もあるからドワーフたちは慌てて飛び起きるのだ。神様に起きると言われていつまでも寝ていられる神経を持つ

ているのは、トルミ村で俺だけだろう。

何ゆえにオーゼリフまでもがトルミ村を徘徊するようになったのか。

いやまあ、それはトルミ特区の建設にオグル族の手を借りたいなど俺が提案したからなのだけどもね。

スツスは喜び勇んで転移門で故郷に帰ると、ものの数十分で数十人の屈強なオグル族たちをトルミ村に招いた。

オグル族は全員がゴツイ。背も高いし、何なら見た目は完全な黒い鬼だ。

しかし、トルミ村にはクレイがいる。見た目が恐ろしい気な獣人族もわんさかというし、強面な人種もいる。エルフ族だってユグル族だってあっちこち徘徊しているのだから、今更新しい種族を連れてこようとも騒がないのがトルミ村住人の肝っ玉の強いところだ。素敵。

オグル族らは己らこそが最強の種族と信じており、オグル族以外の種族は皆庇護対象となるらしい。膨大な魔力を持つユグル族のネフェル爺さんまでもが守らなければならないご老人であり、庇護対象は命に代えても守ることを誇りとしているのだ。

そんなオグル族の人の良さに付け込んだのは俺です。

オゼリフ半島の秘境で密やかに暮らすのも良いけれど、こんな立派な種族が存在するのだぞとスツスはずっと皆に自慢したかったらしい。それならばご披露しましょう。

オグル族はゆつくりと喋ればマデウス共通言語であるカルフェ語を理解してくれるし、有翼人の

言語はルジエがいなくともルジエの加護によりトルミ村限定で会話は可能になっている。

トルミ村には新たな種族が二つ仲間入りした。

ベルミナントの頭痛によく効く回復薬を木箱五分献上させていただいた。もろもろの対処を頑張ってくれ、領主様。

トルミ特区の建設は更に早まり、計画ではひと通りの建築物は三か月以内に完成する予定だ。

本日の俺の予定は早朝からビーをはじめとした目覚まし部隊に強制的に起こされ、村の食堂で美味い朝食を取り、忙しく出かける支度をして出かけた。プニさんの背に乗って、アルツェリオ王国の王都へと向かうのだ。

空飛ぶ島で手に入れた新しい食材を、王都の握り飯専門店である鮭皮亭へと卸すのだ。

こういったことは通常専門業者とかさ、商人や商業ギルドを通じてやり取りをするべきなのだろうけども、魔法の中着袋を運用した商品取引はまだまだ試験段階。

そのため、握り飯専門系列店の後援者の一人でもある大公閣下の許可を得、俺がわくわくとしながら新しい食材であるポンポンジャク——こんにやくを鮭皮亭の新メニューとして調理法を教えに来たのだ。

王都はいつ来ても人でごった返している。

最近ではトルミ村とその周辺地域も賑やかになったが、やはり首都たる場所は歩く人の服装や持

ち物が違う。

時々なんてそんな派手な服着てんの？ という格好の人も見かけるが、それはそれで物珍しい。

「ピューー？」

俺の頭の上で隠れなくても良いのか聞いてくるビーに、俺はそういえば初めて王都に来た時はビーにレインボーシープの着ぐるみを着せていたなと思いついた。嗚呼、あの時のこともこビーも可愛かった。鞆に保管してあるから、そのうち着てもらう。

「ビーのことを無理やり連れ去れるヤツはいないだろう？ ビーは可愛くても、立派な古代竜なんだから」

「ピューー」

「それに、俺は王都でもそこそこの顔を知られるようになってきたからな。ビーもこの機会に自由に動いて顔を覚えてもらおう。拉致られるのは困るけどそんな馬鹿な真似をするヤツはいないだろうよ。王都には優秀な警備兵や騎士がたくさんいるからさ」

「ピューピュー？ ピュッピュ」

「うん。噛みついていいよ。だけど噛みちぎっちゃ駄目」

「ピューー！」

俺は蒼黒の団としても顔は知られているだろうから、俺たちに絡んでくる連中はいいない。

なんせ国が特例として「蒼黒の団の団員に直接の依頼は禁止」という異例の法律を新たに作った

からだ。

法律として定めなければ、俺は王都に足を踏み入れた瞬間に取り囲まれていただろう。珍しいものを見せてだとか、ナニナニを寄越せだとか。

新しい法律まで作らせてしまったのは気が引けたが、おかげで俺はどこへ行っても気楽に歩くことができるのだ。国王陛下様、関係者各位、ありがとう。

もしもビーを拉致ろうものなら、ビーが嘔みつく前に俺が魔法で相手を凍らせてやる。

魔法の訓練のおかげで、死なない程度に加減することだってできるようになったんだからな。ふふ。

賑やかな大通りを歩くと、王都民の視線が一斉に集まる。無論、俺の頭の上で音程の狂った歌を陽気に歌っているビーに視線の多くは集まるのだが。

「まあ、握り飯屋の店員さんよ」

「あの人が？ 確か蒼黒の団の団員よね？ 本当に大きいのね！ 旦那の倍はありそうだわ」

「そりゃアంతは小人族だからだろう。知っているか？ アイツはオールラウンダーの素材採取専門家なんだって」

「本当かい？ はあああ、寝ぼけた顔をしているが、まさかオールラウンダーとはな。俺、はじめて見た」

誰が寝ぼけた顔ですか。

俺は素材採取専門家ではありませんよ。

素材採取家ではあるけども、食材採取家とも料理人とも魔道具士とも呼ばれておりますよ。最近では子供用移動ジャングルジムとしての役目を有翼人のフアドラに託しました。警戒心ゼロのトルミ村の子供たちに群がられて焦っていたフアドラの顔は面白かったな。

ぶっちゃけると、俺は注目されることに慣れた。

今までさんざん色んなことをやらかしてきたから、否が応でも慣れるというものだ。

トルミ村、アシユス村、エルフ族の村、ドワーフの国など様々な国で様々なことをやらかし、大勢から注目されることが多かった。

熱烈な視線を送られると気不味くなるけども。

「ビューイ、ビュー」

「用事を済ませてからな」

ビーが屋台で売られている何かしらの串焼き肉が食べたいと言うが、あれを食べればあっちも食う、次はあちらもと屋台めぐりが始まってしまふ。今日は観光で来たわけではないのだ。

香ばしい匂い漂う料理に気を取られないよう、わき目もふらず足早に二番街中央通りの十字路へと歩みを進めた。

庶民が住む三番街からも近いこの場所は、王都での一等地とも言える。

店持ちが一度は中央通りの十字路で店を構えたいと憧れるその立地の目立つ場所に、長々と続く

行列があった。

行列は警備の兵によって綺麗に整頓され、歩行者の邪魔にならないよう誘導されている。店が開いている日は毎日これなのだからその人気は語るまでもない。

つい先日その場所に店舗を構えたのは、王都で人気の握り飯専門店「鮭皮亭」。

「あれっ？ タケル兄ちゃん！ ビーちゃんもいる！」

行列を誘導していた一人が飛び跳ねて叫んだ。

最近ますます背が伸びて店の仕事を精力的にこなせるようになった、猫獣人の末っ子。

待機中の人に持ち帰り用のお品書きを渡したらどうかと俺が提案したのだが、それを早速実践してくれているようだ。

鮭皮亭本店のオーナー一家、猫獣人の三姉妹の末っ子ソーリは「本日のお品書き」と書かれた木の板を数枚胸に抱えながら俺に駆け寄ってきた。

「こんにちは！ いらっしやいます！ 今日はどうしたの？ ビーちゃんごきげんよう！」

「ビューー！」

おう。

相変わらず元気で、少々せっかちで落ち着きないのは変わらないか。

だけど待機列でお品書きを渡せるくらい店の手伝いができるようになったのか。良い成長だ。

「こんにちはソーリちゃん。今日は親父さんか女将さん、いるかな」

別店舗へ指導に行くこともある猫獣人の夫婦は、今や王都で大人気の食堂経営者として名を馳せている。

夫婦は穏やかでお人好しで優しい性格なので、悪い連中に騙されやしないかと不安だった。だがしかし、鮭皮亭の後援者は大公閣下であることは周知の事実。たまに庶民に交じって高価そうなお仕着せに身を包んだ大公閣下を目撃することもあるとかないか。何してんだグランツ卿。

そんなわけで鮭皮亭は今日も大繁盛しているようだ。

「お父ちゃんは厨房にいるわよ。お母ちゃんはお店のなか。ユーリ姉ちゃんは三号店で、ミーリ姉ちゃんは二号店に行っているわ」

ソーリは言いながらも行列の整理をする。

友人の子供の成長を見るのは、なかなか感慨深いものだ。

特に獣人族の子供の成長は人族よりも早い。人族の赤ん坊が一歳前後で二足歩行ができるようになったところ、獣人族の赤ん坊は二足歩行で走り回るそうだ。

三姉妹の年齢は正しくは知らないが、初対面で言葉足らずの幼児だったソーリは、今や立派な鮭皮亭の従業員。立派に成長して……ちよつと泣けてきちゃう。

三姉妹の上二人は別店で修業しているのかな。将来、別店の店長になりたいと息巻いていたユーリとミーリだ。今もなお夢は変わらず頑張っているだろう。うんうん、感慨深い。

「それじゃあ親父さんと女将さんに会うよ。またあとでね」

「ビューイー」

俺はソーリの頭をコチヨコチヨと撫なでると、待機列の連中からジロジロと見られつつ列の先頭へと向かい店の中をうかがう。

「こんにちはー、お久しぶりでーす、タケルです」

「ビューイー」

お昼時の今は店内での接客（イートイン）はせず、持ち帰り弁当（テイクアウト）だけにしている。

店内に案内して食事を提供してとなると、どうしても回転数が悪いからだ。

王都で働く人たちは時間を惜しんで仕事をする。昼食も飲み込むように片手間に済ませるのが主流。だから大通りには簡単に食べられる料理の露店がひしめき合っているのだ。

ちなみに貴族は昼食を取らない。パンやサンドイッチのような軽食、甘味を食べてお茶を飲む。そうして夕飯にコース料理を食べるのだ。

——王都の昼飯は握り飯に決まっているじゃない。

なんて流行になったのはいつの日のことか。まさかグランツ卿が率先して鮭皮亭に通っていると知らなかった。店の良い宣伝になっているようだ。

テキパキと持ち帰り用弁当を作っている数人が俺に気付き、軽く頭を下げてくれた。厨房の奥にいただろう親父さんに声をかけて当人を呼ぶ。

「やあやあやあ、タケルさん、お久しぶりです」

少しだけふくよかになった相変わらず毛艶の良い猫獣人の親父さん。

三姉妹の父親であるユルウさんだ。ユルウさんのたふんとした脇腹のルーズスキンをもちもちしたい衝動と必死に戦う。

「前触れも出さず申し訳ないです。新しい食材を手に入れたので、すぐにでも知らせたくて」

俺が鞆を開いて手を突っ込んでみると、女将のクミルさんも厨房から出てきてくれた。

「まあまあまあ、タケルさん！ お久しぶりです！」

挨拶あいさつが一緒。

似た者夫婦だなあと微笑ほほえみ、女将さんは少し……ちよつと……また肥はえたかなあ、と密やかに思う。鮭皮亭を訪れたのは数か月ぶりだが、家族全員いろんな意味で元気そうで良かった。忙しそうだけれども楽しそうに働いている。

クミルさんのもっちりっぷりは、有翼人の巫女でありルカルウたちの本来の保護者であるパオネを連想させた。まだ少しパオネのほうが大きいかな。横に。

パオネは順調にダイエツトを成功させている。この食材を上う手まく料理してもらえば、美味しく健康くわに痩やせてもらえるだろう。

太ふっているとか痩やせているだとか、そういった美醜の問題ではないのだ。

歩くだけで息切れをしてしまうような身体は、絶対に様々な病気を発症することになる。既に何

かしらの疾患を患っているかもしれない。今は良くとも将来を考えたらせめて歩くだけで息切れしない身体であって欲しい。

「ユルウさん、クミルさん、これが新しい食材、こんにやくです」  
靴の中から取り出したのは、白いポンポンジャク。

赤いポンポンジャクのほうがよく煮汁を吸うのだが、あれは監獄迷宮と化した空飛ぶ島の赤い珊瑚の塔でしか手に入らない。しかも螺<sup>カタ</sup>階段を百段上ったところにしか生えないので、貴重。

握り飯屋鮭皮亭で期間限定か数量限定で扱うには、一定数が必要になる。白いポンポンジャクも美味いことにならないので妥協した。

取り出した白くてグネグネしていてくったりとしている白いポンポンジャク。見た目はイソギンチャクか珊瑚か見分けは付きにくいのが、王都に住む人は海産物にあまり縁がないと聞く。

俺が掴んで取り出したそれを凝視した二人は、顔を見合わせて再びポンポンジャクに視線を落とす。

「あ、その反応は疑っていますね。ごぼうの時と同じ顔をしていますよ」

「ええ……ごぼうはとても美味しかったですし、今でもきんぴらごぼうとごぼうの漬物は人気商品です。ごぼうを刻んで入れた炊き込みご飯は数量限定だったのにもかかわらず、数刻で売り切れてしまっただけです」

それは良かった。

「ごぼうも初めは木の枝だと思っていたでしょう？ これもまあ……見た目はこんなんですけども、ちゃんと調理したら美味いんです。それに、カロリー、えっと、熱量？ なんとというか、たくさん食べても太りにくいし、身体に良い食材なんですよ」

「あらまあ！ タケルさん、それは本当？」  
ユルウさんがずっと身体を乗り出した。

「はい。調べたところによりますと、これは成分がほとんど水です。おまけに水分を含むと大きく膨らむ性質を持っているので、煮汁をたつぷり吸うことができます。煮汁の濃さにもよりますが、薄味のこんにやくは噛みごたえもじゅうぶんあり、たくさん食べても菓子や肉料理に比べてずっと太りにくいんです」

「まあまああ！」

「そんな不思議な食材があるのかい？」

くったりとしたポンポンジャクを二人に手渡すと、二人は大きな肉球でそれを恐る恐る触れたり握りしめたりしていた。

ポンポンジャクは食材として、ベルカイムの冒険者ギルド、エウロパで正式に鑑定<sup>アバリス</sup>してもらったのだ。

鑑定結果はこんにやくと成分が一緒。ただ、赤いポンポンジャクは魔素含有量が多いので扱いに注意が必要。同じ赤い塔内で採取した白いポンポンジャクは、魔素含有量がほぼないという不思議

生物だった。

受付主任のグリッドは海産物と聞いて珍しいと驚き、副ギルドマスターのウエイドは嫌悪を隠さず顔をしかめていた。

「水が溢れるわけではないのに、確かに水のような感触がしますね」

ウルウさんが料理人の顔つきに変わった。

水分を多く含んでいるうえ、ここから更に水分を吸う。いくら茹でても噛みごたえは変わらないから、たくさん咀嚼しなくては飲み込めない。咀嚼すればするほど満腹感が得られる。

その代わり、味付け次第では酒の肴にもなる。つまりいくらでも食べられてしまうという難点もあつたりする。

「これは一体なんですか？」

「ポンポンジャクという海藻の一種です。俺はこんにやくと呼んでいます。海藻ってわかります？ 海にしか生息しないのですが」

「わかります。王都にも僅かですがダヌシエ港の干物が入ってきておりますからね。ですが、生の海藻とは……また珍しい」

ポンポンジャクは海産モンスターの一種でもあるのだが、それは言うまい。歩くイソギンチャクに似たモンスターだと教えたなら忌避されるかもしれないからな。

ウルウさんがポンポンジャク——こんにやくをそのまま口に入れそうになったので慌てて止める。

「あああ、細かい棘が表皮にありますので、必ず湯通しをしてください。そのまま食べても何の味もしません」

猫獣人の、というか手のひらに肉球を持つ獣人族の手のひらは人族よりも衝撃や痛みが強いと聞く。俺は採取用の手袋をはめてからトングや菜箸で掴むようにしないと、こんにやくのちいさなトゲトゲが指に刺さって痛いのだ。

ウルウさんは真剣な顔でこんにやくを持ったまま厨房に行き、俺が教えたように鍋で煮てからまな板の上に置き、一口大に刻んでいった。こんにやくをどうやって調理するか何か思いついたようだ。

「この食材の名前は、こななく？」

「こななくではなくて、こんにやくです。こん、にやく」

「こん、みやく」

「こん、に、やく」

「こん、にやく。こんにやく」

「そうです。こんにやく」

「こんにやく」

クミルさんは「にやく」が発音しづらいようだ。

「ただ」ポンポンジャクって言葉は長い。ルカルウや他の有翼人たちにとってポンポンジャク

という言葉には忌避感があるだろう。ポンポンジャクは体罰の際使われる鞭むちだったのだから。

ポンポンジャクを流通させるにあたり、ポンポンジャクの名前は封印し、「こんにやく」というカロリーオフの健康食品として売り出したいのだ。

「本当にたくさん食べても身体に良いのかしら？」

「他の食材に比べたらの話です。何事も限度つてものがありますからね。それと、たくさん食べすぎるとお腹がちよつとゆるくなる可能性があります」

「あらあら。それじゃあ、気を付けて食べないと」

こんにやくは水溶性食物繊維が豊富であり、水分を吸収して膨張する。腸内に溜まったうんこを……と、そこまで説明するのはやめておいた。

ともかく、食べてみるのが早い。

俺が鞆に保存してあった調理済みのこんにやく料理を取り出そうとしたら、厨房から皿に盛った料理を手にユルウさんが戻ってきた。

「鳥のささみとごぼうを煮てからさつと炒めてみました。めんつゆで味付けをし、ゴマをふりかけたら案外と握り飯の具にも合うのではないかと」

おおお。

さすが王都人気食堂の筆頭料理人だ。ユルウさんは俺がクミルさんとこんにやく談義をしている間に、一品完成させてしまった。しかも、俺が出そうとしていた調理済みのこんにやく料理と殆ど

一緒。俺は鶏肉ではなくてヒヨコ豆とごぼうで調理した。

めんつゆは王都の食材店ならどこでも購入できるほど一般的になりつつある。握り飯発祥の店である鮭皮亭のめんつゆが一番美味いと評判。

ユルウさんが持ってきた料理に、店内で忙しく働いていた従業員の注目が集まった。

それぞれ「新しい食材……」「新商品……」「白くてグネグネの……」という呟つぶやきと共に発せられる、ギラギラとした視線が気になる。

これはごぼうを持ってきた時と同じ反応だ。

俺が新しい食材を使ってみてくださいと今日と同じように店を訪れ、ごぼうを取り出した。木の枝だとか何の変哲もない棒だと疑っていたくせに、調理してみたらその歯ごたえと奥深い味に感嘆していたっけ。

まあ、未知なる食材、しかも見た目がアレな食材っていうのは忌避されるものだ。カニとか。カニとか。

前回のごぼうをふまえて、今回は疑いよりも期待が多いようだ。よしよしよし。

トルミ村やベルカイクム近辺では既にこんにやくを使った料理が作られている。カロリー控えめで腹持ちが良い食材として、最近腹のでっぷり具合が不安なドワーフの親父連中に大好評。さて。

こんにやくは王都でも受け入れられるだろうか。

「うん……、うん、うん。これはまた不思議な歯ごたえだ。ごぼうとも違う食感……」

「不思議な食感だわ！ だけど、噛みごたえがあつてとても美味しいわ。こんにやくそのものに味はないのね？ それなら、どんな味にもなるということかしら」

「食材のままだと僅かに塩味を感じるが、これは料理人なら気付ける程度だな。うん、味付け次第では酒のつまみにもなりそうだ」

湯通ししたこんにやくは純白から透明感のある白へと変化する。沸騰したお湯に入れた瞬間に細かい棘がぬるつとぼろぼろほぐれるのが見えていて面白い。

厨房の奥ではウルウさんに頼まれた料理人たちが、さっそく興味深げにこんにやくを眺めていた。「湯通ししてすぐだと形も変えられます。熱いんですけど、一口大のこんにやくをぎゅつと握るとまんまるになります。その丸まったこんにやくを串に通して甘めのめんつゆで味付けしてから炭火で焼くと、串こんにやくみたらし味になって子供のおやつになります」

湯通ししたこんにやくの形が自在に変わるのは白こんにやくのみ。

「ゴマ油と鷹の爪で味付けすれば酒のつまみになりますね」

ウルウさんの料理人魂に火が点いたようだ。よしよし。

ちなみにスツスはこんにやくを刻んで炊き込みご飯にアレンジしていた。

追加のこんにやく入りの麻袋を鞆から数個取り出すと、ウルウさんは目を輝かせてこんにやくの入った麻袋を受け取った。

「こななくは定期的に入荷できますか？」

「こんにやくです。仕入れ先が見つかったばかりなので、王都全店舗に卸す数は揃えられないかもしれません。まずは試験的に本店で試してください」

「わかりました。握り飯の具、酒のつまみ、子供のおやつ、様々な料理に化けそうな気がしますね。これは料理人の腕が鳴ります」

ウルウさんは麻の大袋いっぱい詰まったこんにやくを大切そうに抱きしめ、今にも厨房へ行ってしまいそうにそわそわしていた。

クミルさんはウルウさんが試しに作ってみたこんにやく料理を全て平らげていた。見た目がアレなこんにやくだ。

二人に忌避されたらどうしようかと不安はあつたが、ごぼうを受け入れてくれた人たちなのだから大丈夫だろうとは思っていた。

グネグネのねつちやりしたイソギンチャクにしか見えない謎の食材だろうと、美味ければそれが正義になるのだろう。

「まずはこれを好きに調理してみてください。鮭皮亭の新しい料理にするなら商業ギルド『グアド』で調理法の登録をしましょう。従業員の賄いまかにしても構いません」

「まずは子供たちのおやつを作ろうか。いや、野菜汁に入れてみても美味いかもしれないな」

「アンタ、その食材はたくさん食べても太らないんですって。今日から私のご飯は全部こななくに

してちょうだい」

こんにやくですよ。

たくさん食べても太らないとは言いませんでしたよ。太りにくくはありますよ。

俺の存在をすっかり忘れた二人は、別れの挨拶もそこそこに厨房へと走った。

「ピュピュ？」

「うん。受け入れてもらったのは良かった。だけど、都合の良い食材ではないことは覚えておいてもらわないと」

俺はこんにやくの調理法一式とこんにやくの取り扱い方、いくら食べても太らないわけではないという注意書きを記した紙をソリーに託し中央通りの屋台街へと向かった。

王都の鮭皮亭でこんにやく料理が広がれば、こんにやくの需要が上がる。

珍しい食材、しかもカロリーオフ、そのうえ名店鮭皮亭での取り扱いとなれば珍しいもの好きな王都の人たちが飛びつくだろう。

空飛ぶ島の赤い珊瑚の塔産のこんにやくは流通させるつもりはない。有翼人の僧兵たちか冒険者たちに採取を依頼するにしても、赤い塔は厳しい環境の監獄迷宮。気楽にふらりと採取に行ける場所ではないだろう。

だがしかし、空飛ぶ島にあるそこらへんの道端に大量に生えているこんにやくは、塔の内部で採取できる白こんにやくと味が変わらない。

キヴォルの民にとってこんにやくは単なる草。放置していればいくらでも増える迷惑な草扱いだったので、量産しなくとも開けた土地にならわんさか生えている。

たとえるならば、日本におけるヨモギやドクダミのような扱いだ。食おうと思えば食えるが、嬉々として食おうとは思わないもの。

こんにやくは放置するとわちゃっと大量に生えてくるので、景観を整えている場所では迷惑な存在。

これが大量に欲しいと言った時の僧兵フアドラの顔を思い出すたびに笑ってしまう。カニを食うと言った時のクレイと同じように嫌悪を露わにしていたのだから。

『これを……食うのか？』と、驚愕の顔をしていた。驚愕というよりもあれは確実に嫌悪。気持ち悪い何言ってるのこイツっていう顔。俺の頭がイカれたと思っただろう。俺にとって幼虫を食うのと同じくらい信じられない行いなのかもしれない。

俺はこんにやくをはじめとした彼ら有翼人が「草」と呼んでいる道端のそれが、地上の民にとっては美味しい食材なのだと説明すると、そこまで文化というのは違うものなのかと感心されてしまった。

海藻や海産物といった空飛ぶ島独特のものは、有翼人にとっての貴重な収入源となる。

孤島に住んでいた有翼人たちには、貨幣というものが存在しない。皆持ちつ持たれつ。神殿が民に食材を配給するなど、各自完全なる自給自足。マティアシュ領と交易は続けているが、これから

はアルツェリオ王国全土に交易品が広まる予定だ。アルツェリオ王国国内での貨幣が手に入るのなら、トルミ村や他の街でも買物が可能になる。

数千年も風の精霊王の庇護<sup>アレルギ</sup>下で匿<sup>かくま</sup>われていた彼らにとつて、地上は興味はあるけども恐ろしい場所。生まれつきの土過敏症<sup>アレルギ</sup>は治るものではない。しかし、クシャミ鼻水に耐えても地上に行つてみたいという声のほうが多いそう。

なんせ有翼人らが慕っている風の精霊王ルジエ様が、地上に興味を持っているから。

尊い神様が興味を持つ場所を知らん顔なんかできない。

細かい取引は商業ギルドやベルミナントとグランツ卿に丸投げしておいた。俺は新しい食材の利用法と新規取引先を紹介しただけ。

そういうのは専門家に任せただけのほうが良いのだ。

## 2 帝国からの報せ<sup>しほ</sup>

「ピユーピユーピユーピュ」

「美味いか？」

「ピュイツ！」

トルミ村にいる時はもふもふたちや村の子供たちの相手、飲兵衛の相手、土木工事、魔法の修業、その他雑用もろもろと多忙を極めている俺だ。ビーと二人きりになるのは久しぶり。しかも久しぶりの王都を歩いているおかげでビーの機嫌もすこぶる良い。

ビーに「成童になったのだから我慢しなさい」は禁句。身体が一丁前でも、ビーの中身はまだまだお子様で良いのだ。もつとゆつくり大人になりなさい。

屋台で買った揚げイモを食べながら、俺たちは歩いて蒼黒の団王都支部を目指した。

支部と言っても大公閣下の屋敷の向かいにある超豪華なお屋敷。

お屋敷というか城に近い邸宅<sup>ていせ</sup>なのだが、俺たちはこの屋敷を殆ど使わない。

トルミ村から王都に繋<sup>つな</sup>がる転移門<sup>テリド</sup>が地下の隠し部屋に設置してあるだけで、屋敷には冒険者ギルドから派遣された管理人が住んでいる。

元冒険者ランクAの大牛族<sup>おおし</sup>のヤアロさんと、その奥さんの元冒険者ランクBの大牛族マリカさんが蒼黒の団に用事がある人の対応をしてくれているのだ。二人とも腕に覚えがあるうえ王都では有名な元冒険者夫婦。穏やかな性格で、とても優しい。

広大な屋敷は週に一度掃除人を入れて清掃してもらい、広大な庭の整備も月に一度は庭師に入ってもらっている。人が住まない屋敷は傷む<sup>いた</sup>のが早いと聞くからな。

広大な屋敷を維持するだけで月に数百万レイブの費用が発生するのだが、これは全て国費から出ているらしい。蒼黒の団を他の国に移住させないための対応らしい。

国費ってつまりは税金なわけでしょう。  
ぶっちゃけ無駄なんじゃなかるうかと。

王都への転移門はグランツ卿の屋敷にも設置してあるので、それを使わせてもらえば良い。俺たちは全員華美で贅沢な屋敷は不要であり、むしろ高価な調度品を傷つけるのが怖いから落ち着かない。

この屋敷には俺たちの私室があるのだけど、3LDKの広々としたマンションの一室のような絢爛豪華な部屋なのだ。

俺たち蒼黒の団のために改装された屋敷は、団員それぞれに等しく同じ広さの部屋がある。

入ってすぐがメインリビング。客を招けるよう、侍従や侍女の控室や台所はリビングから繋がっている隣の部屋にある。

リビングから続く部屋は寝室になっていて、クレイが三人横になってもまだ余るほどでつかいベッドがどっかありと。キラキラの天蓋付き。どこそこ産の高価な木材と高名な誰々さんが作成した高価な寝台なんて、落ち着いて眠れるわけがない。寝室にもソファードテーブルがあり、ここで食事することも可能。

リビングから逆隣の部屋は執務室になっていて、天井高く設置された書棚と部屋の奥に置かれた重厚な執務机がどんどんと。絨毯はこれまたどこそこ産の超高級なアレコレ。

調度品も全てが一流品。カーテンを縛る紐にも宝石がついていた。ここまで贅沢だと、逆に無駄

の極みとしか思えない。

だがしかし、もしも蒼黒の団が賓客を招く時はこの屋敷が必要となるらしい。

例えばユグル族の王であるゼングムや、その婚約者である王女ルキウスを招く時なんかはこの屋敷でなければならぬ。

ゼングムを辺境の田舎村にようこそするのは、グランツ卿が却下した。

アルツェリオで何かしらを学ぶために来るのなら、まずこの屋敷に滞在してもらい、秘密裏にトルミ村へと招待するのだ。

国としての体裁がどうたらこうたらで面倒くさーと思ったけれど、ユグル族は国を挙げて歓迎するつもりだから覚えておけとグランツ卿に念を押されてしまった。

国としてはユグル族の魔法技術を是が非でも教えてもらいたいのだろう。トルミ村に移住したユグル族はトルミ村の発展にだけ魔法を使うからな。

そんなわけで蒼黒の団の屋敷は、ある意味で迎賓館のような使われ方をするらしい。

ただし、泊まれるのは蒼黒の団と関わりのある賓客のみ。

一番街と呼ばれる貴族や豪商が住む地区へと進むと、一気に人通りがなくなる。

金持ちは徒歩で外出することがなく、ほぼ馬車で移動するからだ。

各屋敷の前に警備兵は常駐しているが、それ以外は人っ子一人歩いていない。ある意味で怖い通りでもある。

そんなゴミ一つ落ちていない整備された歩道を、俺とピーは食べ歩き。今日も王都の屋台の品ぞろえは素晴らしかった。

「ピュピュ？ ピュー」

「ギルド外の依頼を持ち込む場合があるからな。屋敷に来る依頼は基本的に無視して良いとは言われているけど、もしかしたら緊急を要する素材を欲しがっているかもしれないからさ」

屋敷に行くのは転移門を使うためでもあるが、蒼黒の団へ依頼をする人がひっきりなしに屋敷を訪れているため、その依頼もひと通り把握しておかなければならないのだ。

基本的には冒険者ギルドを通さなければ蒼黒の団は依頼を受けないのだが、冒険者ギルドを通さなくて無理難題を言う貴族やら豪商やらがいる。そういったのは放置していたら後々面倒なことになるので一応確認しておかなければならない。

いつもはグランツ卿が後見人を務めている商会の人に対応してくれているのだが、いかんせん今はトルミ特区の建設にかかりつきりになっており、そのうえ有翼人たちの交易も任せてしまったため多忙を極めているのだ。

俺もそこそこ忙しい身の上ではあるが、こんなにやくの調理法を伝えるのは俺が適任ということで王都へのお使いを任された。ピーのご機嫌取りとも言う。

屋敷に届いた依頼書やら手紙やらは管理人ご夫婦が開封せずに保管しているので、俺はそれを受け取って全てグランツ卿へと渡す。緊急性のあるものとそうでないもの、俺たちは絶対に受けない

だろう依頼を精査してくれるのだ。

依頼の中には国にとって旨味のあるもの、グランツ卿の手札となるものなどが交じっている。そういうものはグランツ卿が改めて冒険者ギルドに任せ、冒険者ギルドが更に精査して俺たちに依頼する手筈となっている。

屋敷を直接訪ねた人の依頼は一度も受けたことはないけども。

「ピュピュピー？」

「ちよつと食いすぎじゃないか？ 夕飯が食べられなくて泣いても知らないぞ」

「ピュピュッピュピーー！」

「いや、端から端まで屋台の料理買わせて全部食って、それでもまだ欲しいなんて」

「ピュピュ……？」

「反則だぞお前！ そんな可愛い顔して！ ぐるぐるソーセージで最後にしなさい！」

「ピュイー！」

そんな他愛のない会話をしながら歩いていると、やっとこさ蒼黒の団の屋敷の門前にたどり着いた。

四方を巨大な壁——もうこれ城壁って言っちゃうよ——に囲まれているため、なるほどこれは馬車で移動したほうが早いと思う。歩いても歩いても壁だった。

うーん。

相変わらず立派すぎる屋敷。いや、城。

王都の王城はこの屋敷の数百倍はあるのだけど、それでもトルミ村のあるルセウヴァツハ領の領主であるベルミナントの城よりでっかいのは気が引けてしまう。

ベルミナントは蒼黒の団はこの城に見合うだけの働きをしているのだからと笑っていたが、グランツ卿が気軽に息抜きするための別宅として利用していることを俺は知っている。

しかも、グランツ卿の屋敷と王城と蒼黒の団の屋敷は地下で繋がっていて、時々国王陛下が執政のパリュライ侯爵を連れてお忍びというか公務の息抜きというか、要はさぼりのためにこの屋敷を利用しているのも知っている。陛下何やってんだらうね。

西の大陸エポルナ・ルトにある大帝国ストルファスで竜騎士<sup>ドラゴンナイト</sup>をやっていたクレイすら、この屋敷は国王陛下が滞在するにふさわしい造りをしていると言っていた。実際に陛下が隠れて来ているらしいからさ。陛下何やってんだらうね。本当に何してくれてんだらうね。

蒼黒の団の所有物なのだから蒼黒の団のお財布から管理費を出しますよと言ったのだが、グランツ卿ではなく国王陛下が首を縦に振ってくれなかった。

話を聞けば蒼黒の団予算というのが組まれ、多少なりとも蒼黒の団に恩を返すための出金はその予算から出ていると。

そんな予算組むなとクレイは怒った。だがしかし、この予算にトルミ特区建設費用も盛り込まれているため、今更なくすことはできぬふんとグランツ卿に言われてしまえば黙るしかない。

「こんにちはー」

「ピュイー」

屋敷の門に直立不動で警戒中の騎士三人に声をかけると、三人は一斉に俺に向かって敬礼をしてくれた。

「お待ち申し上げておりました、タケル殿！」

「たたいま屋敷に伝令を放ちます、このまま少々お待ちいただけますか！」

「こんにちは。こっち二人は新人だから硬いけど、気にしないでね」

「ピュピュ」

「うんうん、ビーちゃんもこんにちはー」

騎士三人のうち、気さくに話しかけてくれるのは第三騎士団第一竜騎士飛竜隊、通称サンイチ所屬だった元竜騎士。

治療術を得意としており、竜騎士兼治療士として活躍していた犬獣人のエーレンフリート氏。

六十七歳って言っているけど、見た目はとても若々しいドーベルマン顔。いかつくて怖そうだが、気さくなおじさんだ。

サンイチはとつくに退任していたが、暇すぎて冒険者として名を馳せていたところをサンイチの大隊指揮官マルス大佐が屋敷の門番に推薦してくれた。

屋敷の門番は屋敷に常駐してくれていて、屋敷の別邸にある管理者やそのほか屋敷に住み込みで

働いている人たちの住居に家族ごと住んでいる。

エーレンフリート氏の娘さんは王城の何番目かのお姫様の専属侍女。息子さんは第四大盾部隊に所属している騎士だ。奥さんは蒼黒の団の屋敷の筆頭侍女を務めてくれている。公務員一家ということかな。

「フリートさん、御無沙汰をしていました」

俺が頭を下げると、エーレンフリート氏は満面の笑みを返してくれる。

「なんのなんの、蒼黒の団があっちこっちで活躍している話は聞いているよ。閣下の『噂話』や光の君の『愚痴』なんかをそれとなくね」

「あはは……」

どんな噂をしているんだ。

光の君っていうのは国王陛下をお呼びする時の隠語。陛下の愚痴って何だろう。有翼人たちを紹介した時は目ん玉かっぴろげて驚いていたけども、あれは俺の責任じゃない。僧兵ファドラがクレイ並みにでつかいから驚くのはわかる。

国の歴史書や神話書に描かれている有翼人は、どれもエルフのように綺麗な見目で華奢な天使のような存在だったからな。そんな神々しい存在を想像していたら、ナイスバルクなキレキレの肉体的美を誇った鳥顔のファドラだもんな。後で陛下の愚痴とやらを教えてもらおう。

エーレンフリート氏は領地を持たない騎士爵。

騎士は騎士と任じられた時から騎士爵という爵位を陛下から賜る。爵位がなければ王城には入れないし、爵位がないと話すことすら許されない人も騎士団の中には在籍しているからだ。

陛下の愚痴を聞くということは、エーレンフリート氏は陛下や執政パリュライ侯爵から相応の信頼を得ているのだろう。そうでなければ、あっちこっちで問題を起こす蒼黒の団の屋敷の門番なんて任せられないか。

「報せは届いていると思うが、新しく常駐騎士として着任した騎士だ。こっちがカルステン・ドゥールラアン・エツヒハルド。そっちがアラストイライン・ペルトン・ワフィン。カールはエツヒハルド伯爵のところの四男で、ペルトンはアラストイライン子爵のところの次男だ」

「よろしくお願ひします。蒼黒の団の素材採取家、タケルです。こっちは相棒のビー」

「ビュビュー」

俺は頭を深く下げると、ビーも俺の真似をして頭を下げる。

アルツェリオ王国の貴族名というのはややこしくて、名前・ミドルネーム・苗字となっているわけではない。苗字・名前・ミドルネームの順だったり、ミドルネーム・苗字・名前だったりする。ミドルネームというか、洗礼名のようなものらしい。それぞれの家が信仰する神を祀る神殿で神官に名付けられるとか。ナントカ族の古語だったり、エルフ語だったり、リザードマンは過去の偉大な英雄から名前の一部をいただくこともある。

貴族との初対面の際は身分が下の庶民から名乗るのが礼儀。

つまり貴族の一員である彼らに対し俺が名乗るのが先なのだが、この屋敷の住人である俺のほうが身分は上になる。身分というか立場というか、ややこしいな。

ところでまた名前が長い。一度で覚えられない。

「ゲープハルト・タタンベル・エツヒハルドが子息、カルステン・ドゥールラアン・エツヒハルトと申します！ 自分のことはカールとお呼びください！」

俺より背は低い、プロライトよりは高いであろう上背。屈強な身体つき。右手には槍を装備している。ピンと尖ったままのしま尻尾。あの尻尾と頭の耳を見る限り、カールは虎獣人なのだろう。人が混ざった獣人族は、耳や尻尾、体毛などにその特徴が出る。

「アラステイン・バルトラン・タタンが子息、アラステイライン・ペルトン・ワフィンと申します。私はペルトンとお呼びください」

カールより穏やかに自己紹介してくれたのは、リザードマンのペルトン。ペルトンも装備は槍、と。

槍を武器として愛用している騎士は、ほぼ元竜騎士であるクレイに憧れていると聞く。

クレイが扱う槍術はクレイ自身が編み出したオリジナルであり、魔王ドラゴニュートに進化したクレイにしか扱えない。だがそれでもクレイの武勇にあやかかって槍を武器に選ぶ騎士が多いのだ。

クレイが竜騎士だったのは西の大陸にあるストルファス帝国でのこと。リザードマンとして初の竜騎士に選抜されたとあって当時は注目されていた。

今はランクS冒険者であり、国王陛下から黄金竜の称号をいただいた荣誉ある冒険者チームのリーダー。子供からお年寄りまで、貴族から奴隷まで、幅広くクレイに憧れている人は多い。

二人ともクレイに憧れている槍術使いの騎士というわけか。二十代後半くらい。俺よりも年上ではあるが、この年齢で蒼黒の団の屋敷の門番に選出されたということは、縁故だけではなく腕も確かなのだろう。

愛称で呼ぶことを許してくれたのはありがたい。聞いた傍から家名を忘れるなんて失礼なんだけど、やはり長い名前は覚えにくい。

「カールさん、ペルトンさん、どうぞよろしく。今回はクレイ……青龍卿じゃなくて申し訳ない」俺が苦笑うと、二人は顔を見合わせてから背筋を直す。

青龍卿とは王都におけるクレイの総称。ストルファス帝国では聖竜騎士セントドラゴンナイトという騎士爵の中では最高位の爵位を持っているクレイ。出自が庶民なのに最高位の騎士爵まで到達した騎士は過去でも現在でもクレイのみ。

クレイの見た目の鱗うろこの青を青龍もじと振り、尊敬を込めて騎士たちはそう呼ぶのだ。

もつとも、クレイは聖竜騎士の爵位を賜ったのち、早々に役目を辞しストルファス帝国を後にしてアルツェリオ王国へと流れてきたらしいが。

そんなクレイは空飛ぶ島で光るハムスターを数匹くつつけてきて、今もなおハムズはクレイの周りをふわふわと飛んでおります。

「いいえ！ オールラウンダー冒険者であるタケル殿にお会いするのも楽しみにしております！」  
カールが嬉しそうに澗と言った。虎尻尾がゆらゆら。獣人族の尻尾が穏やかにゆらめくのは、喜んでいる証拠。あらやだ本心？ 嬉しい。

「ピュイイ」

「はい！ ブラックドラゴンの幼竜であるビー殿にお会いするのも楽しみにしております！」

「ピュイイ」

そうだろう嬉しいだろうと胸を張るビーが可愛い。幼竜と言われて噛みつかずに受け入れたのは褒めてあげよう。屋台の美味い飯をたらふく食べさせてご機嫌にしておいて良かった。

「これこれ、屋敷の主人を門前で立たせたままにするんじゃないよ。嫁さん……じゃなくて、筆頭侍女様のおなりだ」

門の向こう、遠い遠い屋敷入り口からこちらを目指して来るのは小型の馬車。

本来ならば馬車で門をくぐって屋敷の入り口まで行くのが通例なのだが、俺は徒歩で屋敷まで来てしまったので馬車を用意してくれたのだろう。

いつもは転移門で来るから気付かなかったけども、門から屋敷の正面玄関までおよそ……五百メートルはあるんじゃないだろうか。うん。次からは馬車で来よう。

「フリートさん、カールさん、ペルトンさん、お疲れ様です。良かったら休憩時間、えっと、これを食べてみてください。試作中の新作焼き菓子です」

俺が鞆から巨大な籠を取り出すと、三人はワツと声を上げて喜んでくれた。

「タケル殿、宜しいのですか？ タケル殿はそこいらの料理人に負けぬ腕をお持ちだと聞き及んでおります。無論、いただけるのであれば大切に頂戴いたします！」

「試作中ということは、まだ鮭皮亭でも扱えないということですか？ うおお……こりや友に自慢できるぞ」

「自分は甘いものが大好物なのです。嬉しいです。ありがとうございます」

フリート、カール、ペルトンと三者三様の反応を見せてくれた。

「できればここだけで消費してください。まだ試作中なので。フリートさんのご家族と屋敷で働いてくれている皆さんには別に用意してありますので、ご遠慮なく」

試作中の焼き菓子は、「食べたらちよつと疲労回復するマドレーヌ」だ。本来のマドレーヌよりも形は小ぶりだが、初期の風邪の症状や肩こり腰痛くらいなら沈静化する作用がある。

本当は一つ食べれば持病も吹き飛ばすようなマドレーヌが作りたかったのだが、グランツ卿に止められた。

——我々の健康状態を気遣ってもらうのはありがたいことだが、治癒士や薬師の仕事を奪うな。

と、言われてしまったのだ。考えなしに作ってしまった俺は猛省。

以来、成分を抑えて「ちょっと疲労回復」程度にしたのだ。

この菓子は鮭皮亭でも扱ってもらう予定ではあるが、専門店を構えることをグランツ卿に推奨されている。推奨というかももう店候補はいくつか決まっております、従業員も決まっております、商品名もただの焼き菓子ではなく、「まーど・れいぬ」という名前。グランツ卿のお仕事、早い。

マドレーヌという言葉が上手く伝わらなかったのだが、なんだかお洒落いさわな響きになったのでよしとする。

重厚な格子状の門がゆつくりと開くと、小ぶりだが豪華な馬車が到着した。

馬車を引くエグラリー産の漆黒の馬は俺の背丈よりも大きい。ぼんえい競馬用の重種馬じゆうしゅばにも似ている。立派な角は黒くてピカピカ。毛艶も素晴らしい。

馬車は小ぶりと言っても俺やクレイが乗るには、だ。

ベルミナントの屋敷に赴いた時に乗った馬車より少し大きい。最大六人乗りらしいが、俺とクレイが乗った時点で馬車内部はキッツキッツ。

蒼黒の団専用として用意された馬車だが、俺たちは滅多にどうか殆ど使わない。

屋敷の地下にある転移門ゲートで直接屋敷に入ってしまうからな。

だけど今日は鮭皮亭にも用事があったため、転移門ゲートは使わずに来たのだ。プニさんに新種のキノコグミ、メロンソーダ味を大量にあげたらご機嫌で空を飛んでくれました。

メロンソーダ味ができたのは全くの謎。緑の精霊王あたりが悪戯いたづらに生えさせたのかもしれないが、

味はとても美味しいのでリベルアリナに感謝しておいた。

帰りはこの馬車で王都の入り口まで送ってもらう予定。そこらへんを飛んでいるプニさんを王都屋台の料理で引き寄せ、再び背に乗せてもらってトルミ村まで帰るのだ。

「タケル様、お帰りなさいませ」

馬車の御者台から降りてきたのは、黒のドレスに水色のエプロンをまとった侍女。

門番であるフリートさんの奥方であり、蒼黒の団の屋敷の筆頭侍女であるアレンカさんだ。

屋敷に常駐している侍女六人のリーダーでもあるアレンカさんは、黒縁の丸い眼鏡が特徴の厳しい女性。

厳しいと言っても人に対してではなく、自分に対して。

完璧主義者というわけではないが、少々潔癖などところがある。仕事に対してとても真面目。

「アレンカさん、こんにちは。依頼書や手紙なんかを回収しに来ました」

「ピュ」

ビーと揃ってアレンカさんに頭を下げると、アレンカさんは眼鏡のふちをくいっと指で上げ。

「使いを寄越してくださいければ冒険者ギルド経由でお届けしましたものを。わざわざ足をお運びさせてしまいました申し訳ありません」

「あ、いや、そんな深く頭を下げないで。俺が来たかっただけだから。ビーも屋台でたくさん料理を食べられたことだし」